

中古語における文補語標識「こと」の使用について

渡 邊 ゆかり

(2004年10月5日 受理)

The Usage of Japanese Complementizer *Koto* in the Heian Period

Yukari WATANABE

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the usage of the Japanese complementizer *koto* in the Heian period.

The Japanese complementizer *koto* was already used in the Heian period. But there are some differences between the Heian period's usage and the contemporary usage. The latter is a consequence of the former's change. But how it changed from the former to the latter has not yet been clarified.

Therefore as a basic research to clarify it, I investigated instances of complementizer *koto* in the tale of Genji, a literary work of the Heian period.

As a result, I found two functions of the complementizer *koto* that are peculiar to the Heian period. One is to express that an event of complement has not happened yet. Another is to emphasize that an event of complement is serious and important to a subject.

These functions of the complementizer *koto* are relevant to the usage of *koto* having substantive meanings.

1 はじめに

渡邊(2004)で指摘したように、現代語における文補語標識「の」、「こと」の使い分けについては多くの先行研究が存在するが、いずれも共時的観察にもとづく説明にとどまっており、両用法の通時的変遷を十分に考慮した上での論考は見えない。

渡邊では、現代語における文補語標識「の」、「こと」の使い分けを、通時的変遷を考慮した上で説明するための基盤研究として、文補語標識「の」の使用がまだ認められていない中古にさかのぼり、中古の日記、随筆における文補語標識「こと」の使用について考察を行った。

その結果、中古語の文補語標識「こと」の使用に関するいくつかの傾向が発見されたと同時に

にいくつかの疑問点が残された。

従って、本稿では、新たに行った『源氏物語』の用例調査の結果をもとに、これらの疑問点を解明することを目的とする。なお、本調査では、用例検索の利便性から、テキストとして、文部科学省大学共同利用機関国文学研究資料館がウェブ上で試験的に公開している、日本古典文学作品データベースの出典にあたる『日本古典文学大系』岩波書店の14巻（＝『源氏物語』1巻）から18巻（＝『源氏物語』5巻）までを使用した。

2 中古の日記、随筆における「こと」の使用

1で述べたように、渡邊では、中古の日記、随筆における文補語標識「こと」の使用について調査を行った。調査に用いたテキストは、以下の6作品である。

「枕草子」『日本古典文学大系』19巻 岩波書店

「紫式部日記」『日本古典文学大系』19巻 岩波書店

「土左日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店

「かげろふ日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店

「和泉式部日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店

「更級日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店

この調査の結果、文補語の表す事象の存在性に関する情報を表す述語、発話行為述語、心情述語、知覚述語について、コト止め文補語をとる例が認められた。また、これらの述語がコト止め文補語をとる際の傾向として以下のことが発見された。

- ・文補語が表す事象の存在性に関する情報を表す述語は、コト止め文補語をとる傾向にある。
- ・発話行為述語は、文補語が伝達内容を表している場合にのみ、コト止め文補語をとる。
- ・心情述語は、文補語が主格か対格かにかかわらず、文補語が述語の表す心情発生時において将来における実現が予想される事象を表す場合には、コト止め文補語をとる傾向にある。また、文補語が述語の表す心情発生時よりも距離をおいた過去に実現した事象を表す場合や、時間的な幅のある反復的事象を表す場合にもコト止め文補語をとることがある。
- ・知覚述語の「きく類」の述語は、述語が文補語の伝達内容を、聴覚器官を通して受容するという行為を表す場合にはコト止め文補語をとることがある。

(渡邊 p. 700)

以下、これらの点について現代語の場合と比較しながら確認していく。

まず、一つ目の文補語が表す事象の存在性に関する情報を表す述語であるが、このタイプの述語のうち、存在述語、程度述語、存在化述語については、次の(1)－(7)に示されるように、中古語、現代語のいずれにおいても「こと」をとる傾向にある。

存在述語

- (1) 文などかよふ こと ありければ、 (かげろふ日記上, まこもぐさ p. 119 1. 16)
 (2) 物のおぼえはるくる こと なく、
 (かげろふ日記中, はらからのおとづれ p. 226 1. 16)
 (3) 太郎は彗星を見た {*の／こと} が {ある／ない}。

程度述語

- (4) あさましうめづらかなる こと, かぎりなし。
 (かげろふ日記上, 妬たき産屋 p. 124 1. 6)
 (5) 花子の作品がすばらしい {*の／こと} は {この上ない／たとえようがない／いい
 ようがない}。

存在化述語

- (6) 御膳まるるとて髪あぐる こと をぞするを、 (紫式部日記 p. 456 1. 5)
 (7) 花子は次の作品で青をモチーフにする {*の／こと} を試みた。

しかしながら、頻度述語、困難・不可能述語、非存在化述語については、次の(8)－(13)に示されるように、中古語では「こと」をとる傾向にあるのに対し、現代語では「こと」のみならず近世に現れたとされる文補語標識「の」もとりうる¹⁾。

頻度述語

- (8) いまさらになにせむにかとおもふ こと しげければ、
 (かげろふ日記下, 臨時の祭の舞人 p. 322 1. 15)
 (9) 太郎が遅れてくる {の／こと} は {しょっちゅうだ／たびたびだ／まれだ}。

1) 文補語標識としての「こと」の使用はすでに上古から認められるが、文補語標識としての「の」の使用は、吉川 (1950: p. 30) によれば、江戸時代初頭から使用されるようになったということである。また頻度述語には、次の (i) の「多い」のように中古語と同様「こと」をとる傾向にあるものもある。

(i) 太郎は、最近、帰宅が遅くなる {*の／こと} が多い。
 これには、述語の品詞性 (副詞か形容詞か) や文の分裂性が関与している可能性がある。

困難・不可能述語

- (10) ふねののぼる こと いかたし。 (土左日記 p. 53 1. 6)
 (11) この件を花子に依頼する {の／こと} は難しい。

非存在化述語

- (12) なかるゝ こと もたえねども, (かげろふ日記上, 二階なるふみ p. 129 1. 16)
 (13) 太郎は花子にこの件を依頼する {の／こと} を断念した。

また、文補語が表す事象が存在化するまでの期間を表す述語については、次の(14)、(15)に示されるように、中古語では、「こと」をとる傾向にあるのに対し、現代語においては、「の」をとる傾向にある。

- (14) 入らせ給ふべき こと も近うなりぬれど, (紫式部日記 p. 472 1. 10)
 (15) 花子が小学校を卒業する {の／*こと} ももうすぐだ。

次に、二つ目の発話行為述語については、次の(16)、(17)に示されるように中古語と同様、現代語においても、文補語が伝達内容を表している場合には「の」ではなく、「こと」をとる傾向にある²⁾。

- (16) 車の入り侍らざりつる こと いひ侍りつる。 (枕草子 p. 50 1. 1)
 (17) 太郎は、先生に次郎が風邪で欠席する {*の／こと} を伝えた。

次に、三つ目の心情述語であるが、現代語においては、橋本(1990)が「補文に《生産されることがら》をとる心的行為動詞」としてあげた創造的な心的行為を表す「思いつく」、「考えつく」、「計画する」、「考案する」、「案出する」、「考える」、「たくらむ」といった動詞は、橋本の指摘する通り、「の」ではなく、「こと」をとる傾向にある。橋本であげられている具体例は、次の(18)－(21)の通りである。

2) 発話行為述語は、基本的に文補語標識として「こと」をとる傾向にあるが、工藤(1985:p. 49)が「基本的に『コト』をとる四つの動詞グループ、つまり思考動詞、伝達動詞、意志動詞、表示動詞が次のように『ノ』をとる場合がある」と指摘するように、「の」をとる場合も存在する。工藤では、伝達動詞、すなわち、本稿でいう伝達内容を表す文補語をとる発話行為述語が「の」をとる表現例として、次の(i)、(ii)のような表現例があげられている。

(i) そしてこの頃のように末造が不意に来ることがあるのを父親に話したら, (工藤 p. 49)
 (ii) 母の病状が悪化の傾向にあるのをしきりに伝えてきたのである。 (工藤 p. 49)

- (18) 正幸は屋根裏に隠れる ??の／こと を思いついた。 (橋本の(25))
- (19) 久夫はかべの穴をセメダインでふさぐ ??の／こと を考えついた。
(橋本の(26))
- (20) 静岡県の人々は芦の湖の水を飲料水に使う ??の／こと を計画している。
(橋本の(27))
- (21) 相馬氏ははさみをセラミックスで作る ??の／こと を考案した。(橋本の(28))

しかしながら、この種以外の心的動作を表す動詞については、Josephs (1976) が指摘したように、文補語が表す事象の経験直後に現れる感情を表す場合は、次の(22)、(23)のように「の」をとる傾向にあり、それ以外は、(24)、(25)のように「の」、「こと」のいずれもとりのうる³⁾。

- (22) 彼女がわっと泣き出した {の／*こと} には閉口した。 (Josephs の(40a))
- (23) 彼がビールを十本飲んだ {の／*こと} には {驚いた／あきれた}。
(Josephsの(42a))
- (24) 久志は授業をさぼった の／こと を後悔した。 (橋本の(21))
- (25) 太郎はつまみぐいがばれる の／こと を恐れている。 (橋本の(22))

また、次の(26)、(27)のような心情を表す形容詞的述語についても、基本的に「の」、「こと」のいずれもとりのうる⁴⁾。

- (26) 太郎は昨日の運動会の徒競走で次郎に負けた {の／こと} が悔しかった。
- (27) 太郎は正月に家族旅行でハワイに行く {の／こと} が楽しみでしかたがない。

一方、中古語の心情述語については、渡邊の調査では、次の(28)、(29)のように文補語が述語の表す心情発生時に将来における実現が予想される事象を表している場合に「こと」をとる傾向が認められた。

3) Josephs では、本稿の(22)、(23)の表現例はローマ字で表記されている。これらの例における漢字仮名交じり表記は著者によるものである。

4) Akatsuka (1978) では、コト止め文補語よりもノ止め文補語の方が自然な例として次の (i)、(ii) があげられている。

(i) *(watasi wa) hikooki ni noru { no/*koto } ga daisuki desu.* (Akatsuka の(27))

(ii) *hanasi no kosi o orareru { no/? koto } ga itiban iya desu.* (Akatsuka の(28))

(28) 君はさは名のたつ こと を思ひけり (和泉式部日記 p. 434 1.7)

(29) こゝをたちなむ こと もあはれに悲しきに, (更級日記, かどで p. 480 1.7)

しかしながら、文補語が述語の表す心情発生時よりも距離を置いた過去の事象を表している次の(30)や文補語が時間的に幅のある反復的事象を表している(31)もみつかった⁵⁾。

(30) 雪を御覽じて、をりしもまかだたる こと をなむいみじくにくませ給ふ。

(紫式部日記 p. 475 1.4)

(31) 折節の心ばへの、かやうに愛敬なく、用意なき 事 こぞ、にくけれ。

(源氏物語 5, 東屋 p. 146 1.4)

最後に、四つ目の知覚述語の「きく類」については、前回の渡邊の調査では、「こと」をとる表現例は、次の(32)、(33)の2例のみで、いずれも文補語が表す内容を、聴覚器官を用いて受容するという意味で用いられていた。

(32) これはまめやかにのたまはせれば、思ひたつ こと さへほのきゝつる人もあべかめりつるを,

(和泉式部日記 p. 433 1.13)

(33) まことにかう讀ませ給ひなどする こと, はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし,

(紫式部日記 p. 501 1.10)

また、前回の調査では、次の(34)のように、同様の行為を表す「きく類」の述語が「こと」をとっていない、すなわち連体止め文補語をとる表現例も数例存在していた⁶⁾。

(34) 猿澤の池は、采女の身投げたる φ をきこしめして, (枕草子, 三八 p. 85 1.8)

しかしながら、現代語においては、述語が文補語の伝達内容を、聴覚器官を通して受容するという行為を表す場合には、次の(35)のように「こと」をとる傾向にある。

5) (31)は、渡邊で東辻(1997)の第1部「構文着目による『もの』『こと』の語彙史的考察」第1章「『もの』構文『こと』構文と精神作用語彙——源氏物語の場合」第6節「『こと』の被修飾事例について」にある表現例を参照した結果発見されたものである。

6) 本稿では、(34)のように連体止め文補語のあとに、文補語標識をとらないことを示す標識としてφという記号を用いることとする。

(35) 先生は、次郎が風邪で欠席する {*/の／こと} を太郎から聞いた。

以上、前回の渡邊の調査結果をもとに、中古語における文補語標識「こと」の使用傾向を、現代語の場合と比較しながら見てきた。その結果、中古語における文補語標識「こと」の使用傾向は、現代語のそれと共通する点もあるが、異なる点も少なくないことが明らかとなった。換言すると、中古語における文補語標識「こと」の使用システムは、現代語における文補語標識「こと」の使用システムと、類似関係にはあっても同一関係にはないといえることができる。つまり、中古語における文補語標識「こと」の使用システムは、時代の変化とともに現代語のそれへと徐々に変化していったものと見ることができる。

本稿においては、以下、この文補語標識「こと」の使用システムの変容プロセスを解明するための基盤的研究として、前回の調査で残された中古語の文補語標識「こと」に関する以下の疑問点について、『源氏物語』の表現例をもとに考察を行っていく。

疑問点 1

前回の調査結果では、心情述語について、文補語が述語の表す心情発生時よりも距離をおいた過去の事象を表す場合や、時間的な幅のある反復的事象を表す場合にコト止め文補語をとる例がみつかったが、このような場合におけるコト止め文補語と連体止め文補語の使い分けの原理は何か。

疑問点 2

前回の調査結果では、「きく類」について、文補語が表す伝達内容を受容するという行為を表す場合に、コト止め文補語をとる例がみつかったが、このような行為を表す「きく類」におけるコト止め文補語、連体止め文補語の使い分けの原理は何か。

疑問点 3

前回の調査結果では、認識述語の「しる」については、コト止め文補語をとる表現例が存在しなかったが、現代語においては「しる」は、コト止め文補語をとりうる。中古語において、「しる」はコト止め文補語をとることは全くなかったのか。また、とることがあるとすればそれはどのような場合か。

3 「おもふ類」, 「おぼゆ類」がとるコト止め文補語と連体止め文補語の使い分け

3-1 コト止め文補語、連体止め文補語の補文末形式とその出現率

前回の調査では、心情述語がとるコト止め文補語の補文末に推量の助動詞「む」の連体形が

比較的よく現れていた。ゆえに、今回の調査では、2であげた疑問点1を考察するにあたり、まず、〈オモフ〉、〈オボス〉、〈オボユ〉を語基とする心情述語がとるコト止め文補語、連体止め文補語においてどのような補文末形式が現れるのかについて調べてみた。なお、本稿では、〈オモフ〉、〈オボス〉、〈オボユ〉といった表記は、語基成分に対して用いることとする。また、語基成分〈オモフ〉、〈オボス〉、〈オボユ〉の総称として〈思〉という表記を用いることとする。

コト止め文補語の補文末形式の種類と各種類の出現数ならびに出現率は、後に示す表1の通りである。また、連体止め文補語の補文末形式の種類と各種類の出現数ならびに出現率は、表2の通りである。

表1 コト止め文補語における各補文末形式の延べ数と出現率

	推 量					過 去		完 了		否定	形容詞	動詞	合計
	む	けむ	らむ	べし	まじ	き	けり	ぬ	たり	ず			
おもふ類 a 1巻	4	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	6
おもふ類 a 2巻	12	0	1	2	0	1	0	0	0	1	0	0	17
おもふ類 a 3巻	3	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	7
おもふ類 a 4巻	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	9
おもふ類 a 5巻	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	2	12
おぼゆ類 a 1巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 2巻	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
おぼゆ類 a 3巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 4巻	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
おぼゆ類 a 5巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おもふ類 b 1巻	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
おもふ類 b 2巻	4	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	7
おもふ類 b 3巻	4	0	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	8
おもふ類 b 4巻	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	6
おもふ類 b 5巻	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	6
おぼゆ類 b 1巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 b 2巻	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
おぼゆ類 b 3巻	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
おぼゆ類 b 4巻	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
おぼゆ類 b 5巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合 計	60	1	2	9	1	5	1	2	1	4	4	4	94
			73			6		3		4	4	4	94
出現率 (%)	63.8	1.1	2.1	10	1.1	5.3	1.1	2.1	1.1	4.3	4.3	4.3	100
			77.7			6.3		3.2		4.3	4.3	4.3	100

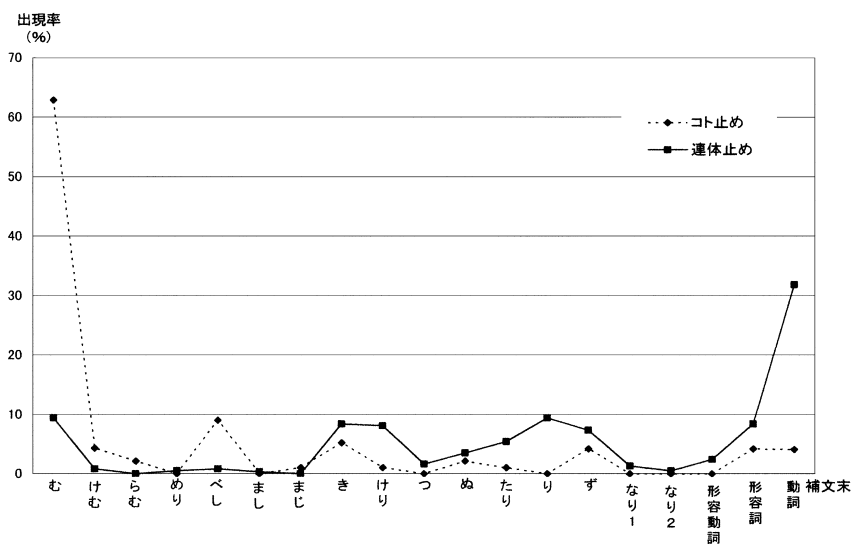
表2の後にあげるグラフ1は、両文補語の補文末形式の出現率の違いを示したものである。

なお、表中ならびに以下の文中で使用する「おもふ類」は、〈オモフ〉もしくは〈オボス〉を語基とする述語動詞を、「おぼゆ類」は、〈オボユ〉を語基とする述語動詞を表す。また、「おもふ類」、「おぼゆ類」のあとに付加されている「a」は、これらの述語動詞が、補文の内容に対する何らかの心情や評価を表す副詞的成分をとっていないことを、「b」は、反対にこのような成分をとっていることを示している。さらに、否定推量の「まじ」は、推量のカテゴリーに含めた。

表1、表2、グラフ1に示されるように、「おもふ類」、「おぼゆ類」がとる連体止め文補語の補文においては、動詞の連体形で終わる率が31.8%と最も高いものの、他の形式の出現率との間

表2 連体止め文補語における各補文末形式の延べ数と出現率

	推 量					過 去		完 了				否定	断定	伝聞	形容	形容	動詞	合計
	む	けむ	めり	べし	まし	き	けり	つ	ぬ	たり	り	ず	なり1	なり2	動詞	詞	動詞	
おもふ類 a 1巻	1	0	0	0	0	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	13
おもふ類 a 2巻	2	0	0	1	0	2	2	1	2	0	0	1	0	1	0	3	1	16
おもふ類 a 3巻	2	0	0	1	0	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1	12
おもふ類 a 4巻	2	1	0	0	0	6	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	15
おもふ類 a 5巻	4	0	0	0	0	3	3	0	0	2	0	0	0	0	0	1	2	15
おぼゆ類 a 1巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 2巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 3巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 4巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おぼゆ類 a 5巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
おもふ類 b 1巻	4	0	0	0	0	3	2	2	3	2	5	6	0	0	4	5	27	63
おもふ類 b 2巻	5	0	0	0	0	1	8	2	1	3	8	6	1	0	1	4	23	63
おもふ類 b 3巻	1	0	0	0	0	1	2	1	1	1	3	7	0	0	0	2	11	30
おもふ類 b 4巻	2	0	0	1	0	4	0	0	1	3	7	1	1	0	2	8	15	45
おもふ類 b 5巻	5	0	0	0	0	1	5	0	0	8	6	4	2	1	0	5	21	58
おぼゆ類 b 1巻	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	1	7
おぼゆ類 b 2巻	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	4	9
おぼゆ類 b 3巻	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	1	6
おぼゆ類 b 4巻	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	4	10
おぼゆ類 b 5巻	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	9
合 計	35	2	2	3	1	31	31	6	13	20	35	27	5	2	9	31	118	371
		43					62		74				27	5	2	9	31	118
出現率 (%)	9.4	0.5	0.5	0.8	0.3	8.4	8.4	1.6	3.5	5.4	9.4	7.3	1.3	0.5	2.4	8.4	31.8	100
		11.6					16.7		19.9				7.3	1.3	0.5	2.4	8.4	31.8



グラフ1 コト止め文補語, 連体止め文補語における各補文末形式の出現率の比較

にそれほど大きな差が存在しない。これに対し、「おもふ類」,「おぼゆ類」がとるコト止め文補語の補文においては、推量の助動詞「む」の連体形で終わる率が63.8%と極めて高く、他の形式の出現率との間に大きな開きが存在する。

従って、文補語の補文末形式という観点から見ると、中古語においては、「おもふ類」,「おぼゆ類」がとるコト止め文補語は、補文が推量の助動詞「む」の連体形で終わるのが最もプロトタイプ的であったとすることができる。また、推量の助動詞「む」は、主に未然のコトガラに対する意志・推量に使用されることから、心情述語におけるコト止め文補語の使用は、文補語が表すコトガラのテンスと何らかの関係性を持っていたことが示唆される。

以下、「おもふ類」,「おぼゆ類」がとる文補語を〈思〉が表す動作時において未然のコトガラを表すものと已然のコトガラを表すものとの二つに分けた上で、各々におけるコト止め文補語と連体止め文補語の使用傾向について考察していく。

3-2 〈思〉の表す動作時において未然のコトガラを表す文補語

3-2-1 コト止め文補語の場合

〈思〉の表す動作時において未然のコトガラを表す文補語には、コト止め文補語と連体止め文補語のいずれもが存在した。

ここでは、まず、コト止め文補語の特徴について見ていき、連体止め文補語については、次の3-2-2でとり上げることにする。

コト止め文補語をとる〈思〉は、以下の①、②のいずれかを表し、「おもふ類 a」、「おぼゆ類 a」の語基成分にあたるものは主に①の意味を、「おもふ類 b」、「おぼゆ類 b」の語基成分にあたるものは主に②の意味を表す傾向にあった。

- ① 未然のコトガラの実現を予想、願望もしくは意図する行為
- ② 実現が予想もしくは意図されている未然のコトガラに対して何らかの心情を抱く行為

以下、まず、①の意味を表す〈思〉の表現例について見ていく。

〈思〉が①の意味を表す「おもふ類」、「おぼゆ類」は、〈思〉に隣接する他の要素との意味的結合度の違いから、以下のAからDまでのタイプに分けることができる。

なお、以下の〔 〕で括られている要素は、互いに意味的結合度が高いことを示す。また、以下の分類では、丁寧の補助動詞「はべる、たまふ」の有無は考慮しないこととする。

Aタイプ 文補語+〈思〉

おもふ、おぼす、おぼゆ

Bタイプ 文補語+〔〈思〉+補助動詞〕

おもひたつ、おもひよる、おほしめしよる、おほしおく

Cタイプ 〔文補語+〈思〉〕+補助動詞

おもひたゆ、おもひつづく、おほしかへす、おほしとまる

Dタイプ 〔文補語+〈思〉〕+〔文補語+語基動詞〕

D 1 前項と後項が時間的前後関係にあるもの

おもひいそぐ、おほしいそぐ、おもひやすらふ、おほしもうく、おほしたばかり、おほしはげむ、おほしのたまふ

D 2 前項と後項が原因結果関係にあるもの

おもひみだる、おほしみだる、おほしなげく

以下、AからDの動詞が用いられている具体例を順にあげる。

Aタイプ

(36) 宰相の君なども、人の御答へきこえむ 事 もおほえず、恥づかしくてゐたるを、

(源氏物語 2, 螢 p. 421 1.14)

(37) 御琴を枕にて、もろともに、添臥したまへり。「かゝるたぐひあらんや」と、うちな

げきがちにて、夜ふかし給ふも、人の咎めたてまつらん 事 をおぼせば、

(源氏物語 3, 篝火 p. 40 1.7)

Bタイプ

(38) わか君の御乳母たち、さらぬ人⁷⁾も、年頃のほど、まかで散らざりけるは、皆、
さるべきことに觸れつゝ、よすがつけむ こと を、おぼしおきつるに、

(源氏物語 2, 滯漂 p. 105 1.5)

(39) かくて、わたり給ひぬべかめれば、こゝに参り來る 事、かならずしも、殊更には、
え思ひたち侍らじ。

(源氏物語 5, 浮舟 p. 248 1.16)

Cタイプ

(40) 女、ものおもひ絶えぬを、親は、よろづに、思ひいふ事もあれど、世に經ん 事 を、
思ひ絶えたり。

(源氏物語 2, 滯漂 p. 116 1.10)

(41) うらなくて過ぐしける世の、人笑はれならん 事 を、下には、思ひつゞけ給へど、

(源氏物語 3, 若菜上 p. 240 1.12)

Dの1タイプ

(42) 若宮は、いかにおもほし知るにか、まゐり給はん こと をのみなむ、思ひいそぐめ
れば、

(源氏物語 1, 桐壺 p. 36 1.9)

Dの2タイプ

(43) 入道の、心細くて一人とまらん こと を、思ひ亂れて、よろづに悲し。

(源氏物語 2, 松風 p. 195 1.3)

上記の表現例について説明すると、(36)の〈オボユ〉、(37)の〈オボス〉、(41)の〈オモフ〉、(43)の〈オモフ〉は、文補語が表す未然のコトガラの実現を予想する行為を表している。例えば、(37)の〈オボス〉は、「人の咎めたてまつらん」ことを予想するという行為を表している。また、(42)の〈オボス〉は、文補語が表す未然のコトガラ、すなわち「まゐり給はん」ことの実現を願うという行為を表している。さらに、(38)の〈オボス〉、(39)の〈オモフ〉、(40)の〈オモフ〉は、文補語が表すコトガラの實現を意図する行為を表している。例えば、(39)の〈オモフ〉は、「こゝに参り來る」ことを意図するという行為を表している。

次に、②の意味を表す〈思〉の表現例について見ていく。②の意味を表す〈思〉の表現例には、次の(44)－(46)のようなものが存在した。

(44) 故尼君も、かしこに、わたり給はん こと を、「いと、ものし」と思したりしこと

7) 二字以上の踊り字については、／＼、／＼という表記を用いることとする。

- なれば， (源氏物語 1, 若紫 p. 231 1. 1)
 (45) とは、の給ひながら、ふと、いり給はむ こと、なほ、つゝましようおほさる。
 (源氏物語 2, 蓬生 p. 155 1. 6)
 (46) はなち聞えん 事 は、なほ、いと、あはれにおぼゆれど、
 (源氏物語 2, 薄雲 p. 218 1. 11)

いずれも、文補語は、〈思〉の表す動作時に実現が予想もしくは意図されているコトガラを表している。

以上、〈思〉の表す動作時に未然のコトガラを表すコト止め文補語の使用傾向について見てきた。次に、〈思〉の表す動作時に未然のコトガラを表す連体止め文補語の使用傾向について見ていく。

3-2-2 連体止め文補語の場合

連体止め文補語をとる〈思〉は、以下の③、④のいずれかを表し、「おもふ類 a」、「おぼゆ類 a」の語基成分にあたるものは、主に③の意味を、「おもふ類 b」、「おぼゆ類 b」の語基成分にあたるものは主に④の意味を表す傾向にあった。

- ③ 未然のコトガラが実現した場合を想像、配慮もしくは想定する行為
- ④ 実現を想定した未然のコトガラに対して何らかの心情を抱く行為

以下、まず、③の意味を表す〈思〉について見ていく。

〈思〉が③の意味を表す表現例には、以下の(47)－(49)のようなものが存在した。

- (47) 右近、はた、かしがましく言ひ騒がれん φ を思ひて、君も、「今更にもらさじ」
 と、忍び給へば、 (源氏物語 1, 夕顔 p. 173 1. 9)
 (48) さていだし放たんは、いと後めたう、さりとて、かくうづもれ過ぐさん φ を、思
 はむも、中／＼、來しかたの年頃よりも、心づくしなり。
 (源氏物語 2, 滯標 p. 123 1. 1)
 (49) かく、おはしならひて、人繁かりつる名残、なくならん φ を、思ひわぶる人／＼、
 (源氏物語 4, 總角 p. 471 1. 9)

上記の表現例について説明すると、(47)の〈オモフ〉は、「右近、はた、かしがましく言ひ騒

がれん」場合を配慮する行為を表している。また、(48)の〈オモフ〉は、「かくうづもれ過ぐさん」場合を想定もしくは想像するという行為を表している。さらに、(49)の〈オモフ〉は、「人繁かりつる名残、なくならん」場合を想像するという行為を表している。

次に、〈思〉が④の意味を表しているものについて見ていく。

〈思〉が④の意味を表す表現例には、以下の(50)－(52)のようなものが存在した。

- (50) 上も、藤壺の見給はざらん φ を、あかずおぼさるれば、試樂を、御前にてせさせ給ふ。
(源氏物語 1, 紅葉賀 p. 271 1.7)
- (51) 見譲る人なくて、残しとゞめむ φ を、いみじく思したゆたひつゝ、年月も経れば、
(源氏物語 4, 橋姫 p. 298 1.9)
- (52) たゞ今、出でおはしまさん φ は、まことに、死ぬべく思さるれば、
(源氏物語 5, 浮舟 p. 218 1.10)

いずれも、〈思〉は、実現を想定したコトガラに対してなんらかの心情を抱く行為を表している。

以上、〈思〉が表す動作時において未然のコトガラを表す連体止め文補語の使用傾向について見てきた。次に、〈思〉が表す動作時において已然のコトガラを表すコト止め文補語と連体止め文補語の使用傾向について見ていくこととする。

3-3 〈思〉の表す動作時において已然のコトガラを表す文補語

〈思〉の表す動作時において已然のコトガラを表す文補語にも、コト止め文補語と連体止め文補語が存在したが、コト止め文補語の例は19例、連体止め文補語の例は336例で、コト止め文補語の使用率は、已然のコトガラを表す文補語のうちの約5%と極めて低かった。

次に、両者を比較してみたところ、コト止め文補語は、連体止め文補語に比べ、主体にとって事件性のあるコトガラ、主体にとって支障のあるコトガラ、主体が悔やんでいるコトガラ、主体が恨んでいるコトガラ、主体にとって貴重なコトガラ、自然の節理といった、主体にとって相対的に重大性が高いコトガラを表していた。

以下この具体例をあげる。

主体にとって事件性のあるコトガラ

- (53) かく、世にたぐひなく物し給ふ人の、はかなく亡せ給ひぬる こと を、口惜しく、あはれに思して、
(源氏物語 4, 御法 p. 188 1.14)

- (54) 二日ばかり、籠りみて、ふたりの人を、いのり、加持する聲、絶えず、怪しき こと を、思ひ騒ぐ。
(源氏物語 5, 手習 p. 349 1.7)

主体にとって支障のあるコトガラ

- (55) 大將の、「さる事のありし」と、語りきこえたらんとき、「いかに、あばめ給はん」と、人の見たてまつりけん こと をば思さで、まづ、はゞかり聞え給ふ心のうちぞ、
(源氏物語 3, 若菜上 p. 314 1.6)

主体が悔やんでいるコトガラ

- (56) 年頃、ものゝついでごとに、口をしく惑はしてし こと を、思ひ出でつるに、
(源氏物語 2, 玉蔓 p. 359 1.9)
- (57) かく、さすがに、もてはなれたる こと は、この度ぞおほしける。
(源氏物語 3, 真木柱 p. 152 1.2)

主体が恨んでいるコトガラ

- (58) 兵部卿の御子も、とし頃の御心ばへのつらく、思はずにて、たゞ、世の聞えをのみ思しはゞかり給ひし こと を、大臣は、憂きものに思しおきて、
(源氏物語 2, 濔標 p. 117 1.15)
- (59) 人目にはゞかりて、え参りこず、きこえぬ こと をなむ、中／＼いぶせくおぼしたる
(源氏物語 3, 藤袴 p. 110 1.3)

主体にとって事件性があり、貴重なコトガラ

- (60) 當代の、かく、位にかなひ給ひぬる こと を、「思ひのごと、嬉し」とおぼす。
(源氏物語 2, 濔標 p. 106 1.10)

主体にとって支障のあり、主体が恨んでいるコトガラ

- (61) おほい殿の六の君を、おぼし入れぬ こと , なま恨めしげに、おとゞも思したりけり。
(源氏物語 4, 椎本 p. 375 1.2)

自然の節理

- (62) 世 (の) 中の常なき こと を、しみて思へる人しも、
(源氏物語 5, 蜻蛉 p. 291 1.13)

ちなみに、渡邊では已然のコトガラを表しながらコト止め文補語をとる心情述語文の例としてあげられていた本稿(30)、(31)の表現例についても、文補語は、いずれも主体にとって支障があり、主体が恨んでいるコトガラを表している。

一方、連体止め文補語は、次の(63)－(68)のように、コト止め文補語が表すコトガラと比べると、相対的に主体にとっての重大性が劣るコトガラを表していた。

- (63) 別れけんあか月の事も、夢の中におぼし出でられぬ ϕ を、「口惜しくもありけるかな」とおぼす。
(源氏物語 3, 若菜上 p. 282 1. 1)
- (64) 猶, まち聞えさする事の, うち忘れず, やみ侍らぬ ϕ を, かつは, 怪しく思ひ給ふる
(源氏物語 5, 手習 p. 361 1. 15)
- (65) 「これは, また, 誰そ. わが名, 漏らすなよ」
と, 口がため給ふ ϕ を, 「いと, めでたし」と, 思ひ聞えたり。
(源氏物語 5, 浮舟 p. 238 1. 11)
- (66) 我 (が) つくれる句を誦じ給ひし ϕ も, おもひ出てきこえ給ふ。
(源氏物語 2, 須磨 p. 49 1. 1)
- (67) されど, あはれにうしろめたく, 幼くおはする ϕ を, 思ひきこえ給ひけり。
(源氏物語 3, 若菜上 p. 256 1. 15)
- (68) 書かまほしきふみなど, 日たけぬる ϕ を思ひつゝ,
(源氏物語 3, 野分 p. 60 1. 11)

以上、〈思〉が表す動作時に已然のコトガラを表すコト止め文補語、連体止め文補語の使用傾向について見てきた。次の3-4では、ここまでの分析結果をふまえ、〈思〉がとるコト止め文補語、連体止め文補語の使い分けに関する認知プロセスについて考察を行う。

3-4 〈思〉がとるコト止め文補語、連体止め文補語の使い分けに関する認知プロセス

これまで見てきた分析結果をもとに、〈思〉がとるコト止め文補語、連体止め文補語の使い分けに関する認知プロセスを図示すると以下の図1のようになる。

以下、〈思〉がとる文補語標識「こと」がこのような認知プロセスのもとで選択される理由について考察する。

まず、〈思〉の表す心情発生時に未然のコトガラを表している文補語について、意図、予想、願望の対象となるコトガラや実現が予想もしくは意図されているコトガラを表す場合に「こと」が選択され、想像、配慮、想定の対象となるコトガラや実現が想定されているコトガラを表す場合に「こと」の使用が制約される理由について考えてみる。

3-1では、コト止め文補語の補文末には、主に未然のコトガラに対する推量に使用される助動詞「む」がよく使用されていることから、中古語の文補語標識「こと」の使用が、文補語の表すコトガラのテンスと何らかの関係性を持っていた可能性があることを指摘した。

ここで、文補語が表すコトガラのテンスに着目し、〈思〉の表す心情発生時に未然のコトガラを表すコト止め文補語と連体止め文補語の使用数を比較すると、コト止め文補語は75例、連体

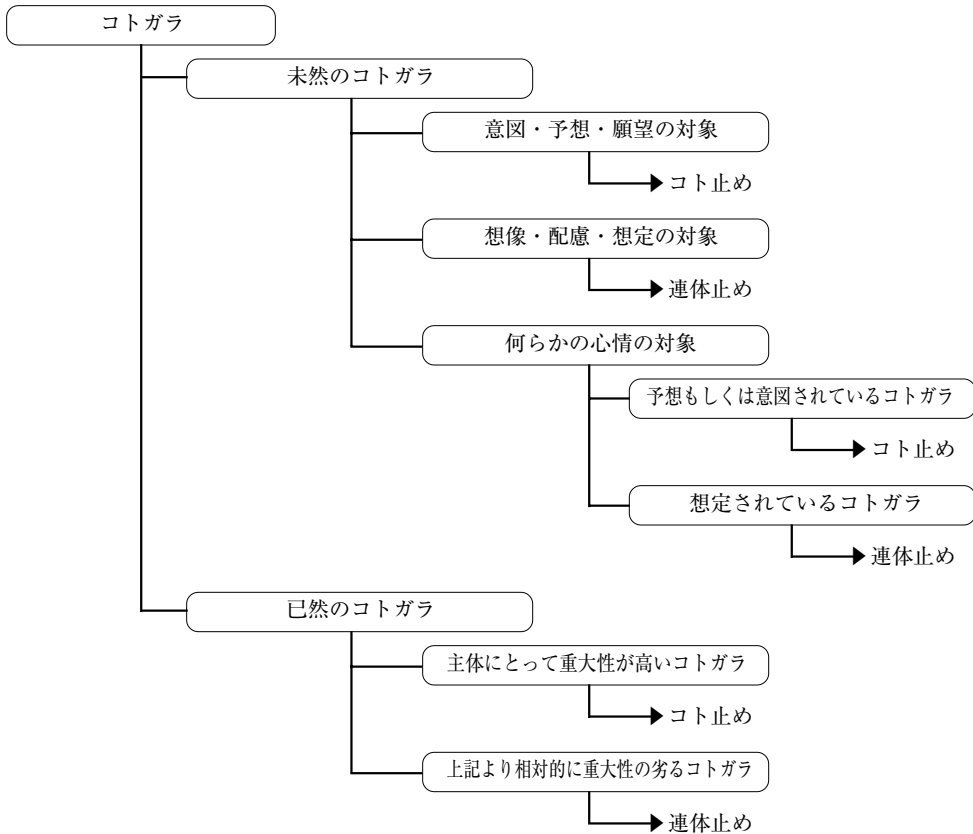


図1 〈思〉がとるコト止め文補語，連体止め文補語の使い分けに関する認知プロセス

止め文補語は36例で，コト止め文補語の使用比率は約68%と比較的高かった。一方，〈思〉の表す心情発生時に已然のコトガラを表すコト止め文補語と連体止め文補語の使用数を比較すると，3-3で示したようにコト止め文補語の使用比率は約5%と極めて低かった。

従って，このような数値から，中古語の文補語標識「こと」には，文補語が表すコトガラの未然性を示す働きが存在していた可能性が示唆される。

しかしながら，文補語が，〈思〉の表す心情発生時において未然のコトガラを表している場合であっても，想像，配慮，想定の対象となるコトガラや実現が想定されているコトガラを表している場合には，「こと」の選択が制約される。これは，想像，配慮，想定といった行為の擬似体験性の影響により，文補語の表すコトガラの未然性が弱まるためではないかと考えられる。

次に，中古語の文補語標識「こと」が文補語の表すコトガラの未然性を示す働きを有しているという前提のもとに，このような働きをもつ「こと」が現れた理由について考察する。

「こと」には，上古より，文補語標識としての用法以外に，以下の(69)－(73)のような，修飾

要素を伴わない「こと」の使用も認められる。

- (69) わがせ こは もの おもひそ ことしあらば
吾背子波 物莫念 事之有者 (萬葉集 506)
- (70) こともなく いきこしものを
事毛無 生来之物乎 (萬葉集 559)
- (71) たらちねの ははにさほらば いたづらに いましもあるも ことなる べしや
足千根乃 母尔障良婆 無用 伊麻思毛吾毛 事應成 (萬葉集 2517)
- (72) なり なむとくに ことはさだ めむ
将成時尔 事者将定 (萬葉集 398)
- (73) ことはさだめつ いまはいかにせも
許登波佐太米都 伊麻波伊可尔世母 (萬葉集 3418)

これらの「こと」の多くは、上記の表現例のように、「あり」、「なし」、「なる」といったコトガラの存在、非存在、存在化を表す述語や「さだむ」のようなコトガラを意図する行為を表す述語とともに用いられ、述語の表す動作、変化、状態時に未然のコトガラを表していた。

このこと、ならびに、自立性の高い内容語から自立性の低い機能語が派生されるという文法化の傾向を考慮すると、文補語が表すコトガラの未然性を示す働きを持つ「こと」は、(69)－(73)のような「こと」の影響を受けて派生されたと考えることができる。

最後に、〈思〉の表す心情発生時に已然のコトガラを表している文補語について、主体にとっての重大性が高いコトガラを表す場合に「こと」が選択される理由について考えると、中古語の文補語標識「こと」が、先に示した働きとは別に、文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する働きを有していたことによるという理由が考えられる。仮に、この理由が妥当であるとするならば、なぜこのような働きをもつ「こと」が現れたのであろうか。

先に、修飾要素を伴わない独立性の高い「こと」の表現例として(69)－(73)をあげたが、このような「こと」は、述語の表す動作、変化、状態時に未然のコトガラを表しているだけでなく同時に個人にとって重大性の高いコトガラをも表している。

従って、このこと、ならびに、自立性の高い内容語から自立性の低い機能語が派生されるという文法化の傾向を考慮すると、文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する働きを持つ「こと」も、(69)－(73)のような「こと」の影響を受けて派生されたものと考えられる。

以上、〈思〉がとるコト止め文補語、連体止め文補語の使い分けに関する認知プロセスについて分析した結果、中古語の文補語標識「こと」の働きとして次の二つの存在が示唆された。

働き 1 文補語が表すコトガラの未然性を示す

働き 2 文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する

次の、4、5では、2にあげた疑問点2、3と関係する文補語をとる「きく類」、「しる」の表現例を観察しながら、中古語の文補語標識「こと」にこれらの働きが存在していたことを確認する。

4 「きく類」がとるコト止め文補語と連体止め文補語の使い分け

2では、文補語が表す伝達内容を、聴覚器官を通して受容する行為を表す「きく類」がとるコト止め文補語と連体止め文補語の使い分けの原理は何かという疑問点をあげた。今回の調査では、この疑問点を解明するにあたり、日本古典文学作品データベース中の『源氏物語』を「聞」で検索し、集まった表現例の中から、文補語の表す伝達内容を、聴覚器官を通して受容するという行為を表す「きく類」のみを取り出し考察を行った。この結果、このような「きく類」の例は25例存在したが、そのいずれもが次の(74)－(78)のように連体止め文補語をとっており、コト止め文補語をとるものは存在しなかった。

- (74) そのころ、高麗人のまゐれるが中に、かしこき相人ありける ϕ を聞き召して、
(源氏物語1、桐壺 p.43 1.15)
- (75) ありしよりけに、御思ひまされる ϕ を、權中納言聞き給ひて、
(源氏物語2、繪合 p.176 1.7)
- (76) 大將の君、かくわたり給ひにける ϕ を聞きて、
(源氏物語3、眞木柱 p.138 1.4)
- (77) おも／＼しき人数、あまたもなく、にはかにおはしましにける ϕ を、聞き召し驚きて、
(源氏物語4、總角 p.436 1.13)
- (78) いみじう、御心に入りて、もてなし給ふなる ϕ を、聞き給ふにも、
(源氏物語5、早蕨 p.26 1.1)

従って、今回の調査結果より、中古語においては、現代語とは異なり、文補語が伝達内容を表している場合であっても、それが伝達行為の対象としてではなく受容行為の対象として意味づけられている場合には、連体止め文補語をとる傾向にあったといえることができる。

しかしながら、前回の渡邊の調査では、伝達内容の受容行為を表す「きく類」がコト止め文補語をとっている(32)、(33)が存在した。ただし、これらのうち、(32)の「こと」については、文補語標識としてではなく、内の関係の修飾構造における被修飾名詞として用いられている、すなわち、「思ひたつ」という動作の対象にあたる「和泉式部が成行のもとに行く」という内容を

表している可能性がある。残る(33)については、「かう讀ませ給ひなどする」が「中宮が自分(紫式部)に進講させなさったりする」という主体にとって貴重なコトガラを表していることから、「こと」は、文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調するために用いられたとみることができる。

5 「しる」がとるコト止め文補語と連体止め文補語の使い分け

2で述べたように前回の渡邊の調査では、「しる」については、コト止め文補語をとる表現例は存在しなかったが、今回の調査では、「しる」が文補語をとる例は20例存在し、このうち、コト止め文補語をとるものが3例みつかった。以下の(79)－(81)がこれらに相当する。

- (79) 「いと、似げなき 事 を、さも、知らでの給ふ」とおぼして、
 (源氏物語 1, 若紫 p. 195 1.12)
- (80) 「誰ならん」と、心さわぎて、おのがさま、見えむ こと も知らず、簀の子より、
 たゞ、來に來れば、
 (源氏物語 5, 蜻蛉 p. 315 1.7)
- (81) おのれは、世に侍らむ 事、今日・明日とも知り難きに、
 (源氏物語 5, 手習 p. 393 1.8)

これらのうち(79)の「事」内は、若紫(幼少の頃の紫の上)の世話をしている尼の心の声の部分にあたり、「似げなき事」は、「若紫がまだ幼少で、源氏の相手としては、似つかわしくない事」すなわち、主体である源氏にとって支障のあるコトガラを表している。また、(80)の「おのがさま、見えむこと」、(81)の「世に侍らむ事」は、「しる」が表す動作時に未然のコトガラを表している。

一方、残りの17例の連体止め文補語については、いずれも、次の(82)－(84)のように、「しる」が表す動作時において已然のコトガラで、相対的に主体にとっての重大性がやや劣るかそれほどでもないコトガラを表していた。

- (82) 内大臣殿の、御願はたしに詣で給ふ φ を、知らぬ人もありけり
 (源氏物語 2, 滯漂 p. 118 1.16)
- (83) 御稔とりによりける φ、君も知り給はぬに、
 (源氏物語 4, 椎本 p. 373 1.2)
- (84) 御手洗河に、御禊せまほしげなる φ を、かくも知らで、よろづに言ひ騒ぐ。
 (源氏物語 5, 浮舟 p. 251 1.8)

従って、「しる」についても中古語においては基本的に連体止め文補語をとるが、文補語が「しる」の表す動作時に未然のコトガラを表している場合や主体にとって重大性の高いコトガラを表している場合には3-4にあげた働き1や2を有す「こと」を選択したとみることができる。

6 考察のまとめ

以上、本稿では『源氏物語』における文補語標識「こと」の使用について前回の渡邊の調査で残された疑問点を中心に見てきた。その結果、中古語の文補語標識「こと」に、「文補語の表すコトガラの未然性を示す」働きと、「文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する」働きが存在することが明らかとなった。また、これらの働きと修飾要素を伴わない独立性の高い「こと」の意義との連続性についても言及した。なお、中古語の文補語標識「こと」は、これらの働きのほかに、存在性に関する言及対象となるコトガラを表す文補語や発話伝達行為の対象となるコトガラを表す文補語に使用されるという特性を有している。

これらの働きならびに特性にもとづく中古語の文補語標識「こと」の使用傾向は、現代語のそれと部分的に類似しているが相違点も少なくない。今後は、中世以降、文補語標識「こと」の選択システムがどのように変化していくのか、近世以降登場する文補語標識「の」の出現がこのシステムにどのような影響を与えたのかといった問題について考察していく。

引用文献

- 工藤真由美 (1985) 「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学の解釈と鑑賞』50-3 至文堂 pp. 45-52
 橋本 修 (1990) 「補文標識『の』『こと』の分布に関する意味規則」国語学会編『国語学』163 pp. 112-101
 東辻保和 (1997) 『もの語彙こと語彙の國語史的研究』汲古書院 pp. 106-166
 吉川泰雄 (1950) 「形式名詞『の』の成立」『日本文学教室』3 蒼明社 pp. 29-38
 渡邊ゆかり (2004) 「中古の日記、随筆における文補語標識『こと』の使用について」記念論文集編集委員会編『平井勝利教授退官記念 中国学・日本語学論文集』白帝社 pp. 681-701
 Akatsuka, Noriko M. (1978) "Another Look at *No*, *Koto*, and *To*: Epistemology and Complementizer Choice in Japanese." In: John Hinds and Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. Tokyo: Kaitakusha. pp. 178-212
 Josephs, Lewis S. (1976) "Complementation" In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics* 5. New York: Academic Press. pp. 307-369